



Title	<書評>國分功一郎・熊谷晋一郎（著）『〈責任〉の生成：中動態と当事者研究』
Author(s)	大門, 大朗
Citation	災害と共生. 2021, 5(1), p. 49-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/84566
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

國分功一郎・熊谷晋一郎（著）『〈責任〉の生成——中動態と当事者研究』新曜社、
2020年12月刊、429頁

大門大朗^{1,2}

Hiroaki Daimon

1. 中動態と当事者研究の「対話」

本書は、現代思想を専門とする哲学者の國分功一郎氏と、当事者研究に造詣の深い医師の熊谷晋一郎氏によるレクチャーをまとめた書である。しかしながら、その内容は、レクチャーという堅苦しいものというよりも、二人の対話をまとめたものである。そして、本書の副題にもある通り、中動態と当事者研究という二人の中心をなす概念を巡った対話となっている。

本書は、『中動態の世界』（國分, 2017）に馴染んだ國分氏の読者にとっても、当事者研究あるいは『リハビリの夜』（熊谷, 2009）に馴染んだ読者にとっても、気づきの多い著書になっている。特に、國分氏の議論は、実際の現場において中動態がどのような実践として「役立ちうるのか」という視点で、熊谷氏の議論は、医師とクライアント、そして介助者と障害者の関係を中動態によって「どう言い表すことができるのか」について、あちらこちらにヒントが散りばめられている。特に、この「災害と共生」ジャーナルにおいて中動態（渥美, 2019; 松原, 2020; 矢守, 2019a）も当事者研究（矢守, 2019b）も核となる概念・実践として採り上げられてきたことを踏まえれば本書は重要な書である。例えば、当事者研究（あるいは協働的实践・アクションリサーチ）という実践の中で起こったことをどう中動態として解釈できるのか、中動態の議論をどうすれば当事者研究（あるいは我々）の実践に落とし込めるのか、といった疑問を検討することを可能にするだろう。そしてさらに言えば、本書は、中動態と当事者研究をクロスオーバーさせた先にあるものも射程に入れた書である。

本稿では、災害研究の中で援用されつつある当事者研究の実践と中動態の概念を接合する一つのヒントを提示することを目的として、本書のエッセンスを読み解いていく。とはいえ、中動態と当事者研究の対話に入る前に、この二つの概念について、本書で両著者が用いる表現を踏まえながら、把握してお

くことが有益であると思われる。

2. 中動態とは——國分氏の対話から

國分氏の用いる「中動態」の概念についてかいつまんで述べておけば、その要点は大きく二つあるといえる。中動態は、行為の方向ではなく主語をめぐる行為の座・場についての文法枠組みだということ、そして（自由）意志からの解放と関わっているという点である。

まず、國分氏が挙げるのは、「する」と「される」によって分けられる能動—受動の枠組みの限界である。これは、主語が行う行為の矢印の向きで表される文法——國分氏の言葉を借りれば尋問の言語——とそれに続いてやってくる行為の原因としての意志についての枠組みである。カツアゲの例を採ってみると、カツアゲされた当人はいやいやお金をあげたのに、このわたしはたしかに自らの「意志」でもってあげたことになる。なぜ今日のお昼にうどんを食べたのかという例にしても、大した理由はないかもしれない。テレビでやっていたからなのか、うどんが家にあったからなのか、はたまた実家がうどん屋なのか……。

それにもかかわらず僕が「自分の意志でうどんを食べることに決めました」と言うとしたら、それは因果関係を意志の向こう側にまで遡っていくのを単に避けているだけです。別の言い方をすれば、意志という概念を使って、因果関係を恣意的に切断してしまっているわけです。意志という概念が切断の効果をもつことがわかります。そしてそれは、本来切断できないものを切断しているわけです。（p.113、國分）

別の言い方をすれば、意志は行為の出発点を「作り出す」。そして、自らの意志によって能動的に行なった主体はそれによって責任を取らされることに

¹ 京都大学防災研究所 日本学術振興会国際競争力強化研究員（CPD）・博士（人間科学）
Research Fellow (CPD), Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University. Dr. Human Sciences.

² デラウェア大学災害研究センター 客員研究員
Visiting Scholar, Disaster Research Center, University of Delaware.

なるのである。

それに対して、意志はもはやそこには存在しなかった世界が古代ギリシャにはあったというのが、中動態を導入する一つの理由である。能動-受動の組み合わせに対して、能動-中動の組み合わせの特徴は、行為の起こる場を問題としている点である。この枠組みは、行為が主体の外部で完結する場合を能動、内部で起こる場合を中動と区別している。

この中動態の世界には、行為の向きで名指されるような関係も、意志のような行為の究極の原因もなかった。そこには、意志から開放された世界があったのである。もちろん、重要なことは、中動態が何かを解決してくれる万能な概念であるということではない。

当たり前だと思っている自分の図式を一度外してみる、あるいはそういった枠組みから距離を取ることこそが大切であって、中動態が救いということではありません。それは『中動態の世界』を貫く僕のメッセージです。(pp.188-189、國分)

行為の責任が帰属される個人の意志というものが存在しない世界があったということ。その認識が自由へと近づくための一歩だということである。

3. 当事者研究とは——熊谷氏の対話から

次に、熊谷氏のいう「当事者研究」について抑えておきたい。そもそも、当事者研究には、障害者の本人がその障害を研究する主体となり、自身の症状を研究したということに大きな転換があった。これは、それまで障害を病気とみなし、健常者から欠落した状態として障害者を扱うという医学モデルを前提としてきた研究者に対する批判でもあった。その中でも、この医学モデルとの大きな違いは、症状の捉え方にある。当事者研究の先駆である「べてるの家」について熊谷氏は次のように述べている。

[...]べてるの家の何が先進的だったかという、一つには、症状は必ずしも消えなくていいんじゃないかと考えた。「消すべき」という発想は、症状にはなんら意味がない、という前提に立ったものですが、べてるの家では、「症状には、自分助けとしての意味がある。では、どのような苦労に対する自分助けなのだろう。それを研究してみよう。」と問いを立て直しました。これが新しかったわけですね。(p.37、熊谷)

このように述べつつも、熊谷氏は國分氏との対話の中で、当事者研究を理解するポイントを、障害者運動の歴史的側面と当事者どうしの関係の強調という実践的側面の二つを念頭に置いて説明している。

まず、歴史的な側面で重要であったのは、個人モデルから社会モデルへ（インペアメントからディサビリティへ）と80年代に大きな変革が起きたことである。社会モデルとは、障害は個人の病気として「治す」ものではなく、変わらなければならないのは、障害者の本人ではなく社会の側にあるというモデルのことである。それまでの個人モデルが、試合に出られない野球部員が素振りばかりやらされるように、健常者と同じことができるようになるということを強要するものであった。

床などに座っている状態から、少し高い場所にあるものを取ろうとするときであるとか、要は、目的と状況的文脈があってはじめて、個々の動作には意味が宿るわけです。けれども、当時私が受けていたリハビリの場合は、まるで状況から切り離されたスナップショット的な形態模写のように、健常者と同じポーズを取る、それだけが目標とされていました。(pp.23-24、熊谷)

ところで、社会を変えよという「社会モデル」の機運の高まりの中で見ると、当事者研究は個人の内面の理解へと向かっているように見える。こう見ると、当事者研究は、外へと向かう運動であった社会モデルと対立する、個人の内向きな運動のようにも思われる。しかし、そうではない、と熊谷氏はいう。

うまくいかないのは自分のせいなのかもしれない、という可能性が否定しきれない状況において、社会に配慮を要求するのは並大抵のことではありません。そして、まさにそういう状況に置かれた当事者のなかから当事者研究は生まれました。(p.31、熊谷)

一見内向きに見える当事者研究は、自らと社会の間にある境界線を引き直すこととして捉えるべきだという。社会を変えるためにはそもそも自らが何者であり、自らで変えることができないのは何かを知ることを出発点としなければならない。

無論、どんな経験であったとしても、それが他者と全く同じ経験であることはない。しかし、自らに

変えられないものは何か、その経験を知るために、共有している仲間との対話を重視し、それによって自分と向き合うこと、これが当事者同士の関係の強調という二つ目の特徴ということになる。

4. 当事者研究にあった中動態——外在化という方法論的態度

当事者研究の中で起こったことをどう中動態として解釈できるのか、確かにこの問いについて、國分氏、熊谷氏双方から明示的に述べられることはない。しかし、対話の中では、随所にそうした箇所が見られる。その中でも、当事者研究の「中動態」的な実践として強く現れているのが、当事者研究の方法論的態度にあると言えよう。

私たちは、なにかトラブルのようなことが起きたときに、犯人探しをしがちですよね。誰のせいなのか？ という発想になりがちです。例えば、地域住民とトラブルになったとき、「誰が悪いの？」「誰が罰せられるべきなの？」という発想に流れることは想像に難くないでしょう。そういう発想に、私たちは無意識のうちに慣れ親しんでいます。けれど、それは研究ではない。犯人を捜し出して解決とするのではなく、あくまでも苦労のメカニズムを探ることを重視するのが当事者研究の方法です。(p.39、熊谷)

「爆発の研究」の中で火をつけてしまう人の例を挙げながら、こうした放火のような行為であっても、それを本人から一度切り離して、自然現象——放火現象——のように扱うべきだというのである。障害を病気として捉え、それを治すという視点でみれば、病気をコントロールできない主体——ここでは放火する「犯人」——を責めるべきである。しかし、それは何の解決も生まないという。むしろ、火をつけた本人からその現象を引き離してしまうこと——外在化すること、そしてそれを当事者とともに向き合うこと、それが重要な態度だという。

この態度には、主体の意志の弱さという問題から訣別し、意志のない世界としての中動態へ向かうことと相即的に思われる。行為の主体とその原因とされる意志、さらにはそれによって帰属させられる責任から、一時的に開放されること、そうした実践としてもこの態度は解釈できるのではないか。別の言い方をすれば、中動態から当事者研究を見ると、その実践の歴史は、個人のインペアメントとして捉え

られた能動—受動パラダイムから、能動—中動パラダイムへの移行だったとも捉えることができるかもしれない。

5. 〈責任〉の生成——「申告飲水制度」、オープン・ダイアログ

一度外在化し問題を引き離すことがなぜ当事者研究において有効なのだろうか。それを考える上で、本書にたびたび登場する「なぜか治る」という例は示唆的である。その中でも、ここでは二つの例を採り上げてみたい。一つ目は、水を何リットルも一気に飲んでしまう水中毒という依存症が激減した画期的な例としての「申告飲水制度」である。これは、文字通り「水を飲みます」と事前に申告すればどれだけ水を飲んでも良いという制度である。そして、二つ目は、統合失調症の急性期にある人の治療法としての「オープン・ダイアログ」である。これは、症状が急性期にあると思われる場合に、家に押しかけ、医療をほどこす代わりに、患者とただ対話をするという治療法である。そしていずれの例も、そうすると「なぜか治る」というのである。

なぜ治ったのだろうか。ここには両著者とも明確な答えを挙げていない。しかし、ここには本書のタイトルである〈責任〉を引き受ける主体の生成があったのではないかと考えると筋が通るようにも思われる。罪を犯したもののこれまで責任というものを感じられなかった男性が、國分氏の講演の中で初めて責任を感じるようになった事例はその中でも興味深いものである。

おそらくその方は「お前は自分の意志で犯罪を犯したのだ」と周囲から言われ続けてきたのでしょうか、自分でもそう思っていたでしょう。だから、むしろ逆に「自由意志など存在しない」という話を聞いて、意志が免罪されたときに、逆に自分が犯した罪を引き受けようとする責任感が生まれたのではないか。そう思ったんです。(pp.46-47、國分)

確かにこの例は楽観的すぎるかもしれない。しかし、申告飲水制度もオープン・ダイアログも、その依存症が誰の意志によって行われたかということ問わなかったことで、かえってその問題に対する「責任」を引き受ける主体が生成されたと考えることができるのではないだろうか。つまり、責任は負わねばならぬものとして主体に帰属する従来のモデルに

対して、中動態のモデルでは、責任は引き受けるものとして主体を生成するよう促す。言い換えれば、中動態は責任に対して当事者が開かれていく側面をもっている。

6. 中動態の世界における「外在化」

ところで、当事者研究における重要な方法論的な態度に「外在化」を挙げておいた。この試みは、その当事者が手に負えない障害を一旦、外在化、あるいは客体化・対象化し、客観的な立場からそれを眺めてその対象を支配（＝コントロール）できるようになるということを仄めかしているようにも見える。これはまさに、対象を支配する「する－される」という関係で表される能動－受動の枠組みに与しているのではないか。だが、この外在化の実践も能動－中動の枠組みから捉えられるべきである。

能動－中動という枠組みの中で、外在化することとはどういうことなのか。そもそも、自らの身体経験から乖離することも多い障害の事実が示唆するように、当事者研究で言う外在化は、客体化というよりも、行為（動作）が主体の外部で起きている（かの）ように解釈する、という（中動態における能動的）態度のことであると言える。こうして一時的に意志は追放される。

そして、この契機には、重要なメッセージが含まれている。では、その現象（行為）は一体どういう主体において起こっているのだろうか。熊谷氏が強調した当事者どうしのダイアログはここで有効になるのではないか。対話を行い、その「現象」を共同で捉えることが、主体の再構築を促す、あるいは、主体への開かれた意味での責任を生成することになる。コントロールしようとしてもできないものに対して、コントロールされるかするか、という枠組みではなく、それが起こっている場所がどこなのかを線引きし直すことで、それに取り組む主体を再編成しようとする試みとして「外在化」は考えられるべきではないか。その意味で、外在化という実践は、能動と受動の枠組みから能動と中動の枠組みへと切り替えること、言い換えれば、行為を現象として身体から一時的に切り離すことで主体を再編成する洗練された実践にみえるものである。

7. 中動態とつきあう：「します性」

この意味での外在化は、中動態という世界が万能ではなく、これまでの枠組みから距離を取るためのものだったという点に一つの具体的な回答を示して

いるのではないだろうか。外在化とは、意志から距離をとることで能動－中動態の世界へ移行するというパフォーマンスな実践である。

しかしこうしてみると、本書においては、意志が過去を切断するものであるという点を逆手に取って利用する実践もみられる。つまり、能動－中動の世界から、能動－受動の世界＝意志のある世界への移行という逆向きの実践である。それは、こうしたいという「したい性」に対して、他のものを切り捨てて（切断して）とにかく何かをするという「します性」について、熊谷氏が述べている箇所に表現されている。

[...] 綾屋さんの「切断戦略」なのですが、自分の内側からの情報や外側からの情報を切断するために、規則を決めておく。例えば、何曜日の何時何分からは、身体がなんと言おうと、状況がどうだろうと、決めたことをすることに「します」。それを「意志」と呼ぶかどうかはともかくとして、規則によって身体内外のアフォーダンスを切断して、とにかく、行為を選択する。（p.209、熊谷）

中動態の世界に入ったとしても人は容易に、自らが何かによって自由でない＝強制されている事態にはまり込んでしまう。そして、身体と外部の境界がゆらぐ人にとって、それはなおさらである。外部の仲間たちとのダイアログに何らかの要因で踏み出せないとき、あらゆるものが——食欲でさえも——ままとまりのないものとして経験される。

これは、当事者研究で一旦ひっそりと脇に置いた「意志」を再び導入する実践と言えないだろうか。切断、つまり何かを無理矢理行うことで身体へのコントロールを確保すること。自らの身体にとってままとまりのない、どうにもならなくなってしまった身体を、意志という効果を用いることで、一時的にコントロール可能なものとしてそれ以外のものを切断すること。それは、中動態へと続く運動とは全く逆の方向を向いた実践である。

8. 災害研究へのインプリケーション

ここまでの議論は、これまで災害研究で指摘されてきたことを再解釈する上でも有用である。ここでは、先に述べた中動態へ接近し意志を追放する戦略と、意志を呼び戻して中動態から距離を取る戦略の二つの例を災害の事例に見出してみたいと思う。

一つ目は、クロスロードによる主体性の回復につ

いての議論である(李・宮本・矢守,2019)。李・宮本・矢守(2019)によれば、災害復興において、外部支援者と被災者、専門家と住民といった、どちらかが行為の主体で、他方がそれを受ける側であるという非対称的な関係で支援をすると、結局、外部支援者が支援すればするほど、復興の当事者たる被災者の主体性が奪われるという。そこで、李・宮本・矢守(2019)は、当事者研究にヒントを得ながら、クロスロードによるゲーミングを通じ、外部者らとともに、当事者の問題を対象化することに重きを置いて、共同で課題を対象化(外在化)したことが、新たな主体性を回復する契機となったと述べている。この戦略はまさしく、中動態へ接近し意志を迫放する戦略と言えるだろう。

二つ目は、「津波てんでんこ」の意味に関するものである(矢守,2012)。矢守(2012)は、「津波てんでんこ」の意味の一つとして、自分も他の人を置いて逃げるだけでなく他者も同じように逃げる、つまり互いに見捨てるという相互信頼を事前に醸成できる点を挙げている。避難意識が高い人ほど、東日本大震災において救助などの避難が遅れたということも報告されているように、本当の意味で避難しようと思えば、周りのことなど放っておいて——切断して——主体的に避難しなければならない。その意味で、この戦略は、逃げられない(逃げるのが憚られる)身体に、意志を呼び戻してそれ以外の要因を切断するよう促すという、中動態から距離を取る戦略だと言えよう。

この二つ目の点には、補足が必要である。津波てんでんこことは、意志による切断の効果を使った避難誘導策とも言うことができるが、言い換えれば、これは、他の人を忘れて見捨てることをも意味する。

しかし、津波てんでんこは、災害が起こった時に見捨てるための切断の効果をもつというよりも、災害が起こる前に相互信頼を醸成するものであった。これは、津波てんでんこがもつ切断の効果を私たちが認識する——言い換えれば、津波てんでんこは他者を見捨てることになると気づいた——とき、責任ある主体が生成する契機となることを示唆している。それは、助けられないという責任を放棄する効果でも助けなければならないという責任を押し付ける効果でもなく、中動態の言葉を借りれば、責任ある存在へと「なる」ための場を生み出すことになるだろう。これは、単に「見捨てて逃げることは是」という、短絡的に津波てんでんこを推進するだけの(責任放棄の)イデオロギーとは全く異なるもので

ある。そして、これは、中動態の世界に諸手を挙げて賛成する態度ではなく、中動態の世界を認識し、その世界を経由したからこそ見える、〈責任〉主体の問題と重なるのである。

9. 災害と共生——社会モデルのその先へ

本書評では、自らと社会の間にある境界線を引き直す当事者研究の実践を、中動態に対して接近する戦略と距離をとる戦略としてまとめてきた。しかし、熊谷氏によれば、この大前提として土台にあった、社会モデルに失調が見られ始めているという。本章ではこの点を指摘し、本書が実践のヒントを得るためのハウツー本ではなく、災害研究におけるこれら変革のための方向を示す書であることを示し、結語としたい。

まず、熊谷氏は、個人モデルと社会モデルという二つのモデルの狭間にあるコミュニケーション障害としてのASDがはらむ問題を次のように指摘している。

[...] 身体障害と違ってASDの場合、その「診断基準」に「コミュニケーション障害」と明記されているわけですね。ここで注意しなくてはならないのが、一般的に、診断基準というのは建前としてインペアメントを記載するはずの文章だということです。[...] 私たちはこうした状況を、「ディスアビリティのインペアメント化」と呼び、批判をしてきました。本来はディスアビリティの次元の現象が診断基準に混入しているにもかかわらず、それがインペアメント次元の身体的特徴であるかのように解釈されている。これは非常に怖いことです。(pp.52-53、熊谷)

個人を診断するインペアメントの基準の中に、社会に問題があるはずのディスアビリティの特徴が流入している。ディスアビリティのインペアメント化とは、ASDのように社会の側に適応できない者を常に障害者として排除できることを意味している。これまで、当事者研究は、自らに変えられないものは何かを問うことで社会の変革を目指した。しかし、その変革を迫るはずの社会が、社会の側にも変えられないインペアメントが見つかったと訴えているのである。熊谷氏は、共生社会への警鐘を次のように鳴らしている。

今は、包摂的な社会とか、共生社会とか言われて

います。しかし、自閉症について、社会性の障害やコミュニケーション障害が根本の特徴だと記述してしまうと、もし、それが変えられない特徴であるなら、社会の構成員としては迎え入れられないという結論になってしまう。(p.218、熊谷)

しかし、熊谷氏と國分氏の対話の中には、社会モデルの先にあるものが部分的ではあるが示唆されているように思われる。中動態が教えてくれるのは、自己を貫く法則をしっかりと認識し、それを実現することであった。そしてそれは、「自らの経験を他の人に奪われてはならない」という当事者研究がすでに実践してきたこととも重なる。なぜなら、当事者研究によって、社会の側だけでなく、確かに当事者自身も変わってきたからだ。熊谷氏は、社会モデルのその先にあるモデルへのヒントを次のように示唆している。

[...] 行き過ぎた社会構築主義の文脈で言うと、必然的な自己の法則を社会的文脈で解こうとしたり、またいっぽうで、[...] 「自分のことばかりにとらわれないで社会に目を向けよう」という社会変化を志向する勢いの中で自閉的・内向的な変状の過程が置き去りにされたりする。

当事者研究を実践するときの「たたずまい」は、ときに自閉的・内向的な状態に見えるかもしれませんが、研究で社会は変わらないように思われるかもしれませんが。けれども、外部からの刺激を受けながらも自閉・内向している変状の過程こそが当事者研究の力点が置かれる地点でもあるのです。またその過程以外に社会変革の源などあり得ない。(p.152、熊谷)

事実、病を直すという姿勢は、災害現場では「心のケア」といった形で被災者個人に広く適用されてきた。そして、こうした病のメタファーは、今、防災や災害復興、そして、コミュニティや集団などの社会心理学的なレベルでも適用されようとしている。集合的トラウマ、集合的否認、援原病……では、そうした「病」が一体どういう形で治るのだろうか。その議論はあまりなされていない。評者としては、集合的に適用されようとしている「病」に対して、本書において中動態と当事者研究の専門家が示そうとしたものが様々なヒントを与えてくれると考えている。それぞれのヒントは本書に譲るとして、その方向は、社会モデルのその先にある実践を志向する

ことだと言えよう。

参考文献

- 渥美公秀 (2019) . 〈助かる〉社会に向けた災害ボランティア：遊動化のドライブの活性化 災害と共生, 3(1), 49-55.
- 國分功一郎 (2017) . 中動態の世界：意志と責任の考古学 医学書院
- 熊谷晋一郎 (2009) . リハビリの夜 医学書院
- 李勇昕・宮本匠・矢守克也 (2019) . 当事者研究からみる住民主体の震災復興：防災ゲーム「クロスロード：大洗編」の実践を通じて 実験社会心理学研究, 58(2), 81-94.
- 松原悠 (2020) . 中動態と避難 災害と共生, 3(2), 15-26.
- 矢守克也 (2012) . 「津波でんでんこ」の4つの意味 自然災害科学, 31(1), 35-46.
- 矢守克也 (2019a) . 能動的・受動的・中動的に逃げる 災害と共生, 3(1), 1-10.
- 矢守克也 (2019b) . 〈書評〉浦河べてるの家(著)『べてるの家の「当事者研究」』 災害と共生, 2(2), 41-45.